

『平和の君に心を向ける』 ルカ2:1-8-14

2:8 さて、この地方で羊飼たちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた。

2:9 すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照したので、彼らは非常に恐れた。

2:10 御使は言った、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。

2:11 きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。

2:12 あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」。

2:13 するとたちまち、おびただしい天の軍勢が現れ、御使と一緒に神をさんびして言った、

2:14 「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」。

●序論

約2000年ほど前のイエスさまの誕生物語。それよりも700年以上も前に記された預言のことばにこうあります。

ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は、「霊妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君」ととなえられる。（イザヤ書9:6）

この神のひとり子イエスさまの生まれようは、今日お読みしたところでもわかるように、ベツレヘムの家畜小屋で生まれ、飼い葉おけに寝かされるありさまでした。

そういう生まれようも含めて、イエス・キリストのメシア（救い主）としてのありさまは、ことごとく、わたしたちの考えや方法と逆を行くように感じることがあります。

しかし、それこそ神さまのなさることであり、また「今日、あなたがたのために」と言われる、つまり私たちのためにということなのです。

●本論

I. この方は、すべての民の喜びです

2:10 御使は言った、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。

神のひとり子の誕生を伝える天使たちこの一文のメッセージは「大きな喜び」でした。このクリスマスは喜びの出来事であるということです。

現代のわたしたちの周囲で一般的なクリスマスの過ごし方は、このクリスマスを”楽しむ”ということかと思えます。

一方で、最初のクリスマスのメッセージが届いた多くのところでは、そこに戸惑いが生まれたことを聖書は記録しています。

マタイはこんな風に記録しています。

ヘロデ王はこのことを聞いて不安を感じた。エルサレムの人々もみな、同様であ

った。(マタイ2:3)

このヘロデ王は、この後その不安に駆られて、ベツレヘムとその付近の地方2歳以下の赤ん坊をことごとく殺すという命令まで発しています。

今の時代にも共通する、争いを生み出す理由の一つは不安です。自分の地位や立場を奪われるかも…という理由で、虐殺や争いを起こす。一人の人の心に抱える「不安」がどれほどの呪いとなるか、この時代でも知るのではないのでしょうか。

ところで少なくともエルサレムの人たちは、楽しみに待っていたはずなのに…、彼らもまた少なからず「不安」を感じただけでした。喜ばないでいたのです。

一方で、神さまが天使を遣わして、最初にクリスマスを告げたのは、当時の世界でもっとも底辺の生活を送っていた羊飼いたちでした。

そんな彼らに神さまは天使と遣わしたのです。彼らがその御告げを聞き、受け取り、応答する人たちであったこと知っていたからです。

まさに、彼らは、喜ぶ人たちであったのです。

2:15 御使たちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼たちは「さあ、ベツレヘムへ行って、主がお知らせ下さったその出来事を見てこようではないか」と、互に語り合った。

2:16 そして急いで行って、マリヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を捜しあてた。

2:20 羊飼たちは、見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさんびしながら帰って行った。

クリスマスの本質は、神がくださったひとり子を心から喜ぶことです。

羊飼いたちが、捜し当てて見たのは、ただの貧しい家庭に生まれた赤ん坊でした。

でも、彼らはその子を、救い主だと信じたのです。

神の言葉を信じる信仰が、彼らをすなおな喜び人としたのです。

## Ⅱ. この方は、わたしたちのための救い主です

2:10 御使は言った、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。

2:11 きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。

羊飼いたちは、神の栄光がめぐり照らされたとき、底辺に生きる自分たちだからこそ恐れたのです。

しかしそんな彼らに天使は、「恐れるな」と告げたのち、「あなたがたへの喜びなんだ」「あなたがたのための救い主なんだ」と告げているのです。

ヨハネ3:17 神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。

あらためて、そこで羊飼いたちが耳にしたのは天使たちの軍勢の賛美でした。

2:14 「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」。

彼らは、確かに底辺に生きていて人々からは認められていないという自覚を持つ人たちでした。だからこそこの天使の賛美の言葉の中で、「あなたがたのために救い主がお生まれになった」と言われたとき、そして、自分たちに向けて「地の上では、御心に適う人々に」と言われたとき、ああ、わたしを神さまが知っていてくださる。わたしを見ていてくださるといふ感動を経験したことでしょう。

わたしをも御心に適う人として認めてくださると。

のちにイエスさまは、こう言われました。

「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」  
(マタイ9:13・新共同訳)

最初に申し上げました。「ことごとく、わたしたちの考えや方法と逆を行く」と。

ここにも、神さまのなされることの不思議を見えています。

そしてこれこそ、わたしたちクリスチャンが共有する恵みの体験なのです。

### Ⅲ. この方は、平和の君です。

最初のクリスマスの歴史的背景について、ルカはかなり詳しく記録しています。

2:1-3 そのころ、全世界の人口調査をせよとの勅令が、皇帝アウグストから出た。

これは、クレニオがシリアの総督であった時に行われた最初の人口調査であった。人々はみな登録をするために、それぞれ自分の町へ帰って行った。

当時のローマはヨーロッパのかなり広い地域を支配下に治め、そのトップに立つ皇帝の権力は絶大なものでした。

彼は、支配下にあるすべての人たちからしっかり税収をとり、また軍に徴兵できる者たちを調べる。そんな調査を「全世界に」勅令として出し、いわゆる「パックス・ローマナ（ローマの平和）」の時代をつくったとも言われます。

そうして、当時のローマ皇帝アウグストゥスは、人々に「神の子」、また「救い主」、そして「平和の君」とも呼ばれていたのです。

実は、ほかにも「栄光」という言葉は皇帝にのみ用いるべき言葉。「福音」という言葉は、当時のローマ帝国では「戦争に勝利した知らせ」や「王に子どもが生まれた」という時に用いられた言葉であったのです。

さて、聖書で、そして初代のキリスト教会で、先に人々の認識にあった各種皇帝のための用語と呼ばれるものを用いて、神の御子キリストを指し示しました。

ローマ皇帝ではない、ほんものの「神の子」とは、家畜小屋で生まれたこの方だよ、と。そして本物の「救い主」は、罪びと、病の人、底辺にいる人のもとに訪れて救うこのお方なのだ。さらに「福音」は、わたしたちの身代わりとして十字架で死なれ、よみがえり、だれでも信じる者を救うという恵みを立てられた、このお方なのだ。

繰り返して申し上げます。

イエス・キリストのメシア（救い主）としてのありさまは、ことごとく、わたしたちの考えや方法と逆を行くと感じるかもしれません。けれどもこれこそ、神由来の本物だと聖書は語るのです。

そうして天使たちはこう証言し、さんびします。

2:14 「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」。

「栄光」は、地上の王や支配者にはではなく、まことの神に。そして「平和」は、神さの御思いのもとに身を置く人たちのもとにあるように、と語るのです。

さいごに)

改めて聖書は、あのベツレヘムの貧しい家畜小屋でお生まれになったイエスさまこそ、神の御子、であり救い主であり、平和の君であることを覚えましょう。

人や国が、科学や軍事力、さまざまな経験をどれだけ強調しようとも、聖書はそこに平和の道を語りません。

平和の道は、人の英知や武力、力の延長線上にはない。それが聖書の証言です。

そこで、聖書は、キリストを通して神さまとの関係の回復、和解を語り、そこにある平安にとどまることへとわたしたちを招くのです。

ある者は戦車を誇り、ある者は馬を誇る。しかしわれらは、われらの神、主のみ名を誇る。彼らはかがみ、また倒れる。しかしわれらは起きて、まっすぐに立つ。（詩篇20:7-8）

何度も申し上げます。

イエス・キリストのメシア（救い主）としてのありさまは、ことごとく、わたしたちの考えや方法と逆を行くと感じるかもしれません。けれどもこれこそ、神由来の本物だと聖書は語るのです。

最後に、そのイエスさまの言葉を…。

わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。（ヨハネ14:27・新共同訳）

クリスマスは、この平和の君が、わたしたちを救いの中に、神の平和の中に迎えてくださるために、来てくださり、十字架にかかってくださり、よみがえられたその始まりの出来事であることを覚えていただければ感謝です。